

『申楽談儀』第十條引用曲に見る研究の進展

表 章

『鎮仙』428号(平成6年11月)に「研究十二月往来(146)」として載った竹本幹夫氏『申楽談儀』所引不明謡小考は、小考の名に似ぬ大きな収穫であった。世阿弥の芸談集『申楽談儀』に引用されていて曲不明だった文句の一つを〈融通鞍馬〉(ゆづうくらま)と指摘した新見もさることながら、廃曲〈融通鞍馬〉が世阿弥時代から存在した古曲であることが判明し、それが世阿弥作である可能性も考えられることから、世阿弥の作品考定や作風の研究にも新たな眼が必要であることを感じさせた、付随効果も大きい。例えば〈道明寺〉の能は、河内道明寺の宣伝貞が強く、〈高砂〉との類似点が多いにもかかわらず、世阿弥周辺で成立した可能性を私は全然考えなかった。そうした先入主は、融通念仏の宣伝色濃厚な〈融通鞍馬〉が世阿弥周辺で演じられていたとなると、再検討を要しよう。竹本氏が〈融通鞍馬〉論をより詳細な形で再論されることを期待したい。

ところで、竹本稿が問題にした記事を含む『申楽談儀』第十條(「文字なまり・節なまり」)は、多くの曲の一節を実際に歌いながら詠り

(アクセントの違)について注意した所らしく、次のように16種もの文句が引用されている。掲出は言及されている順である。

- ① 松には風の音羽山 (曲舞謡(由良湊))
- ② 秋の野風に誘はれて (謡物(女郎花))
- ③ 小野の小町は (曲舞謡(実方))
- ④ 人の宿をば貸さばこそ (祝言謡(夏))
- ⑤ うけつぐ国 (笠卒都婆)
- ⑥ 三笠の森 (笠卒都婆)
- ⑦ 一念弥陀仏 (笠卒都婆)
- ⑧ とりわき神風や (融通鞍馬)
- ⑨ 恵みひさし (鶉羽)
- ⑩ 春ごとに君を祝ひて (謡物(雪山))
- ⑪ ゆうべの風にさそはれ (江口)
- ⑫ 老翁いまだ (曲舞謡(白髭))
- ⑬ げにや皆人は六塵の (江口)
- ⑭ 光源氏と名を呼ばる (須磨源氏)
- ⑮ くわんどう誤つて (雲雀山)
- ⑯ きんみつと申もの也 (古曲(雲林院))

下部の括弧内が曲名で、研究者の探索が集積してここまで判明したのである。『申楽談儀』研究の進展の跡を顧みる意味で、その経緯を

略述しておこう。

右の16例中、末部の⑬⑭は、いわゆる現行曲に含まれる文句である。明治41・42年に吉田東伍博士が『申楽談儀』を世間に紹介した直後から、曲名がわかっていったろう。⑯の白髭は、世阿弥時代には曲舞謡としてのみ存在していた。それを能(白髭)の文句と誤解していたし、⑭は後代の(雲林院)では文句に小異があるが、その二点を無視して言えば、大正15年刊の野々村戒三氏著『世阿弥十六部集』の頭注がすでに6例に曲名を注している。

他の10例も昭和になって次々と曲が判明してくる。雑誌『謡曲界』が昭和11年1月号から連載を開始した「申楽談義を読む会」は、山崎楽堂・松野奏風・三宅襄・観世武雄氏が常時出席メンバーの座談会形式の論談会だったが、その第十回分(11年11月号)の中で山崎楽堂氏が③を乱曲(実方)と指摘された。同文は他曲にも見えるが、詠りの生じ易い曲舞謡の一節と見る山崎説が以後は通説となった。

右の論談会の読み方を批判する形で香西精氏(当時33歳)が『謡曲界』に投稿した論文が、氏の学界への初登場で、『申楽談儀』のみならず世阿弥研究全体に新風をもたらしたが、その『談義愚注(四)』(昭和12年2月号)の中で香西氏は、①が乱曲(由良物狂)の、⑥⑦が廃曲(笠卒都婆)(古名(重衡))の一節であること、

及び⑩が昭和7年に観世宗家から刊行された世阿弥の音曲伝書『五音』所収の(雪山)に見えることを指摘された。現行能の詞章のみならず、乱曲(曲舞謡)や廃曲にも目をくばり、新出資料にも注意を怠らなかつた氏の着実な方法が、第十条の引用文句の出典解明に大きな成果をもたらしたのである。昭和19年刊行の能勢朝次博士著『世阿弥十六部集評釈(下)』の『申楽談儀』でも、香西氏の業績が高く評価され、しばしば言及されている。

戦後の『申楽談儀』注釈は、昭和35年刊の岩波文庫『申楽談儀』(表章著、戦前の野上豊一郎博士校訂本と区別する通称が表本)に始まる。同書の脚注では⑤と⑨の典拠を指摘したが、⑨の分は香西精氏から御教示を得たのであり、⑤は、本文に「夏の祝言にうけつゝ国」とある(夏の祝言)が、観世宗家蔵の室町末期書写の小謡集『四季祝言』所収曲であること報告したのである。

かくて13例までは曲が判明し、②④⑧の3例のみが曲不明として残ったが、まず②が江戸初期まで歌い次がれていた田楽喜阿弥作曲らしい謡物(女郎花)の一節であることを、昭和49年に表章が指摘した(『観世』7月号「女郎花の古き謡」考)。これは、自身の世阿弥伝書研究の集大成のつもりだった思想大系『世阿弥・禅竹』の刊行直後のことであり、同書

の第二刷(50年10月)で頭注を修正している。

それから20年以上を経て、⑧が(融通鞍馬)であることを指摘したのが前述の竹本稿で、残るのは④の「人の宿をばかさばこそ」だけになった。諦めていた⑧が判明したのについて、誰かが④の曲名を究明してくれることが期待される。「かさばこそ」は「貸すはずがない」の意であり、「人が宿を貸すはずはない」といった意味(他人の宿を…)ではあるまい)の詞章を含む廃曲の探索が必要であろう。

なお、竹本氏の発見には、『世阿弥・禅竹』での私の校訂が若干は寄与しているらしい。

問題の部分の本文を、最初に世阿弥伝書を紹介した吉田東伍博士の『世阿弥十六部集』は、とりわけ、「神風やはしめたまつり」「たて」とあたるわろし。

と校訂し、「やはの右に「和」と振漢字を当てていた。「神風和(やは)しめ奉り」が謡曲の詞章と解していたわけで、以後、野々村・能勢・川瀬一馬(世阿弥二十三部集)の諸先学ともに同じ読み方を採用していた。私も、昭和35年の岩波文庫表本では、「やはしめ」はおかしいと感じつつも、「神風や、初め奉り」も自然なので、「和」の振漢字を避けただけで、「神風やはしめ」を本文にしていた。36年の『歌謡集・能楽論集』(『申楽談儀』は表校注)では、頭注に「『神風や…はじめたまつり』など、

途中を省略した形か」と一歩前進した解釈を示し、『世阿弥・禅竹』では、「とりわき」は『申楽談儀』の地の文に用例がなく、そこからの謡曲の引用と考えるべきことに思い至って、「とりわき神風や、はじめたまつり」「たて」と当る、悪し。

を本文とし、頭注に「曲不明。途中を省略した形の引用か」と記した。「やはしめ」なる表現はあり得ないとの判断に基づき、「神風や」からすぐに「初め奉り」に続くのは謡曲文として不自然なことから、『申楽談儀』に他例のない途中省略を想定し、「とりわき」から引用と気づいて、やっと到達した結論であった。それが正解だったことを竹本氏稿が証明してくれたのである。

竹本氏の世代から以後の研究者は、ほとんどが『世阿弥・禅竹』をテキストに世阿弥伝書を読んでいる。「とりわき神風や」の校訂本文が竹本氏の頭に記憶されていたからこそ、(融通鞍馬)を読んで「ああこれだ」と気づいたはずで、もし「神風やはしめ」の形で記憶されていたら、今度の新発見はなかったかも知れない。とすれば、竹本氏の新見にも若干は寄与したことになる。などと考えて、後れをとった自分を慰めている面が、ないではないようである。

(法政大学能楽研究所員)

[95・1・4]